



# 日本植物病理学会ニュース 第69号

(2015年2月)

## 【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 奥田誠一



1944年3月8日、京都府生まれ。1967年3月東京大学農学部農業生物学科卒業。1973年3月同大学院農学系研究科農業生物学専攻博士課程修了、農学博士「植物の萎黄叢生病の病原に関する研究」。1973年4月同研究科研究生、1974年4月日本学術振興会奨励研究員を経て1975年4月

宇都宮大学農学部助手に採用。1978年6月同助教授。1986年4月東京農工大学大学院連合農学研究科併任。1991年11月から1992年8月まで文部省在外研究員（合衆国農務省ベルツヴィル農業研究センターほか）。1992年9月教授。2005年12月宇都宮大学農学部長（2008年3月まで）。2009年3月定年退職、名誉教授。2010年4月から2013年3月まで東京農業大学農学部教授。

学会では1967年から正会員。主な役職は評議員、会計監査、学会報編集幹事長、病名委員、会計幹事、関東部会長、平成19年度大会委員長、ほか。

著書（共著）に Plant Diseases due to Mycoplasma-like Organisms in Japan (FFTC, 1978), 植物ウイルス事典（朝倉書店, 1983）, 新植物病理学（朝倉書店, 1992）, 植物病理学事典（養賢堂, 1995）, 植物防疫講座 病害編（日本植物防疫協会, 1996）, 最新植物病理学（朝倉書店, 2004）, など。

大学院に進学した頃は、正に研究室ではマイコプラズマ様微生物（現ファイトプラズマ）の発表（1967年、夏季関東部会および日植病報原著論文）に向けて隠密裡に作業が行なわれていたときであった。当初は一刻も早く培養を成功させなければという方針で、途中から研究室の都合により急遽わたしが引き継ぐことになった。当てもなく時間ばかり使い、とどのつまり不毛な結果に終わったことは周知

の通り…一方で培養に成功したという論文がいくつか国際誌に掲載され、その都度身も細る思いをした。その傍ら新病害をいくつか記載し、媒介虫としてヒメフタテンヨコバイ（西村典夫氏との共同研究）とキマダラヒロヨコバイ（織田眞吾氏、小池賢治氏との共同研究）の2種を決定することができた。

学会の運営に関わるようになってまず気がついたのは、学会がいかに多くの人のボランティア精神に支えられているかということである。学会が目指すところは学問の発展と会員への支援、社会貢献。このために会員の一層の協力を得て日本植物病理学会が更なる発展を遂げることを切望したい。

名誉会員 高浪洋一



略歴：昭和19年2月3日福岡県生まれ。昭和41年九州大学農学部農学科卒業。同年日本専売公社入社、秦野たばこ試験場に配属、昭和48年同中央研究所に転任。昭和52年九州大学より農学博士の学位を取得。昭和55～56年カリフォルニア大学バークレイ校分子生物学部博士研究員、Dr. Fraenkel-Conratの下で植物のRNA依存RNA合成酵素について研究。昭和59年同公社鹿児島たばこ試験場研究室長、昭和61年日本たばこ産業（株）中央研究所、同生命科学研究所主席研究員。平成4年九州大学農学部植物病理学教室助教授に転任、平成8年教授、平成19年定年退職、九州大学名誉教授。大学在職中、JICA短期専門家としてメキシコ、アルゼンチンにてウイルス病防除に関する技術指導に従事。平成20年～現在、一般社団法人九州病害虫防除推進協議会会長。

日本専売公社時代、都丸敬一博士（故人）、久保進博士の下でタバコの各種ウイルス病についての基礎的ならび

日本専売公社時代、都丸敬一博士（故人）、久保進博士の下でタバコの各種ウイルス病についての基礎的ならび

に防除に関する研究に従事，平成10年「キュウリモザイクウイルスの感染増殖に関する分子生物学的研究」により日本植物病理学会賞受賞。

学会活動：平成12～19年日本植物病理学会評議員，平成12～15年原著編集委員，平成13～16年九州部会長，平成16年大会委員長，平成17～18年副会長，会長を歴任。その他，九州病害虫研究会幹事，編集委員，日本ウイルス学会理事，評議員，編集委員などを務め，学会の発展に寄与。

著書：植物病原性微生物研究法（ソフトサイエンス社，1993），作物ウイルス病事典（全国農村教育協会，1993），植物病理学事典（養賢堂，1995），植物ウイルスの分子生物学（学会出版センター，1996），ウイルス学（朝倉書店，1997），最新植物病理学（朝倉書店，2004），Compendium of Brassica Diseases（APS Press, USA, 2007），微生物の事典（朝倉書店，2008），IFO微生物学概論（培風館，2010）ほか，以上いずれも共著。

最後に，ご指導およびご協力を頂いた恩師，先輩，同僚ならびに多くの学会員，卒業生の皆様に心より感謝申し上げますとともに，本学会の益々の発展を祈念する次第です。

#### 永年会員 木村俊夫



昭和13年新潟県生まれ。寒村育ちで，高校卒業後一時就農したが，昭和35年宮城県農業短期大学へ入学し，濱田正實先生にご指導を頂く機会に恵まれた。卒業後，企業の試験機関に勤めたが，昭和40年恩師の下での教育・研究の補助者へと転身した。昭和52年及び58年に公立

大学研修員として，東北大学で山中達先生のご指導を頂いた。学会では，東北部会の幹事，監事，教育プログラム，編集幹事，植物細菌病談話会，土壤伝染病談話会の開催地幹事を務めた。

昭和40年～：貧弱な研究設備や経費の中で，ハクサイ軟腐病の発病と病原細菌の動態について，研究補助の仕事が始まった。しかし，恩師が不治の病にみまわれて退かれ，研究は遅滞しながらも支援を頂き継続させていただいた。昭和40年代末～：校舎移転に伴い試験圃場は未整備状態。橋本保先生が就任され，マイナー作物病害の発生生態の解明，防除法の検討，新病害の提案を行った。昭和60年～：試験圃場の整備に伴い，新墾地でのハクサイの連作，輪作，混作条件での軟腐病の発病と病原細菌の動態について解明を行った。既報の結果と差異を生ずることが間々あり，新

たな課題に巡り会えた。平成元年～：菊本敏雄先生の支援を受けた農薬メーカーのバクテリオシン産生非病原性軟腐病菌による軟腐病防除薬剤の開発試験に加わり，菌株選抜の圃場試験を担当した。生物農薬として日の目を見，安堵した。また，畑土壌中での軟腐病病原細菌の腐生的生存を，新手法を用いて追跡し，ハクサイの腐敗根残渣で越冬することは認めたが，地温が上昇するとその生存は不明となった。時流で短大の4大化構想が浮上し，改組計画の業務に関わり研究は中断した。幾多の懸案課題を抱えながら平成14年停年退職した。翌15年から宮城県植物防疫協会では，農薬の実用化試験のお手伝いを行っている。

恩師濱田正實先生退任後，研究上のご指導を直接頂いた菊本敏雄，富樫二郎，常にご教導を頂いた山中達，江原淑夫，羽柴輝良，高橋壯，生井恒雄の各先生，会員の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

#### 永年会員 贅田裕行



1939年2月21日東京都に生まれ，1963年3月東北大学農学部農学科（植物病理学研究室）を卒業，同年9月に群馬県に就職し，農業試験場病害虫課で1986年3月まで勤務した。その間，国の補助事業「土壤病害検診員」に命じられ，3年間，野菜，果樹，特用作物等の土壤病害を調査，その分布図を作成した。群馬県の特産であるコンニャクの「乾腐病」が生産現場で普遍的に発生しておりその防除対策は水銀剤による種芋消毒であったが，水銀剤の使用禁止で生産現場の種芋消毒が困難となり防除技術の確立が急がれることが，この実態調査で判明した。そこで，土壤環境，コンニャクの品種等と発病との関係を明らかにし，コンニャクの生スライスを利用した農薬のスクリーニング法を開発して消毒剤の選別をはかるなど，総合防除に資する要素等を調査・研究し，1984年，農林水産省農業研究センター所長岸国平博士のご懇篤なるご指導とご助言を賜り「コンニャク乾腐病の発生生態と防除に関する研究」で東北大学より学位を取得した。また，1970年，ニラの白斑葉枯病（*Botrytis* sp.），1974年，コンニャク紫腐病（*Cylindrocarpon didymum* (Hartig) Wollenweber）を新病害として発表した。

一方，1986年4月に，農林水産省の肝いりで農業振興の一環として6次産業の普及を図るべく各県に農産加工センターが設置され，群馬県もこの事業を受け入れ，群馬県

農産加工指導センターを設け、初代の所長に就任した。1988年4月、本庁の農政部部長室に異動、試験研究機関と行政との調整をすることになった。1990年には農政課の構造改善室長に就任。1993年には同じ農政課の金融指導室長、1994年に農業技術課長、1995年に農政部副部長兼農政課長、1997年～1999年には農政部長に就任した。部長になっても現場に赴き、生産者との懇談会を設け、現場主義を貫いた。退職後、1999年6月、財団法人農業公社副理事長に赴任し、農地保有合理化事業を推進、2003年3月退任した。2003年9月、株式会社カネコ種苗監査役に赴任、現在に至る。最後に、未だ学会に所属しているのは、学会誌を1ページでも読むことにより、私自身の励みとなっているのである。

ちなみに、2012年11月3日、叙勲（瑞宝双光章）を頂きました。感謝申し上げます。

#### 永年会員 大沢高志



1936年6月8日群馬県生まれ、1961年3月宇都宮大学農学部農学科卒業。同年4月から静岡県農業試験場で病害試験研究に従事。1997年3月、農業試験場長で県職員を退職。同年4月から7年間、温室メロン生産団体に技術顧問を務める。2004年4月から地元肥料会社で病害虫相談塾を開設、さらに、同会社と共同でトマト生産の農業生産法人を設立、代表取締役を務める。

静岡県農業試験場では約10年間国指定試験に従事し、イネ蒔葉枯病の生態と防除法を確立した。1970年頃から春取りトマト産地で原因不明のしおれ症が発生、このプロジェクトに参画、原因の1つはタバコモザイクウイルスによるものと判明したので、対策に弱毒ウイルスの動力噴霧器による接種法を実用化し、防除に成功した。この課題で1978年に全国野菜園芸技術研究会から感謝状を受けた。また、1975年頃からキク産地で原因不明の輪紋モザイク症状が大発生、原因究明につながる病徴の再現に成功し、防除法を確立した。1970年頃西日本のスイカに緑斑モザイクウイルス（CGMMV）が発生、この頃から温室メロンでも蔓延した。1980年から国の「生物学的手法による病害虫の制御に関する特別研究」が開始され、農業資源研究所でCGMMV弱毒ウイルスを開発、現場で利用技術を確認するプロジェクトに参画し、10数年間甚大な被害を被っていたCGMMVの防除に成功する成果を得た。同じ1980

年頃から温室メロンで収穫期から出荷後に果実が腐敗する新病害の陥没病、褐色腐敗病が発生、原因や防除法を解明した。本研究により、東京大学より学位を取得した。1997年にこれら「野菜及び花き類の難防除病害の生態解明と防除技術の確立」で農業技術功労賞を受賞した。現役引退後は肥料袋に有機質培土を詰めてトマト苗を植え付け、栽培、収穫終了後再び不耕起で苗を定植して栽培、これを長年繰り返して栽培するバッグ土耕方式の高糖度ミニトマト栽培体系を確立。この方式でミニトマトを生産する一方、普及を図っている。

終りに、現場で起こった難問を解決するために、長年にわたりご指導、ご支援をいただいた大学や国等の諸先生方に感謝申し上げますとともに、本学会の益々のご発展を祈念いたします。

#### 永年会員 坂本 庵



1939年1月1日、長崎県で生まれる。1962年3月、鳥取大学農学部農学科を卒業。同年4月から4年間、鳥取県果樹試験場（現・園芸試験場）に勤務。同場では梨園の土壤、肥料及び水管理等の試験研究に従事した。1966年、縁あって兵庫県立農業試験場病虫部に奉職。同場では

農作物全般の病害の試験研究に従事。2年程経った頃ピーマンにウイルス病らしき症状が発生し、小生がその対策の任に当たることになった。1969年、当時千葉市にあった農林省（現・農林水産省）植物ウイルス研究所で故 小室康雄先生をはじめ栃原比呂志先生、亀谷（旧姓：岩木）満朗先生及び新海 昭先生の懇切な御指導を受け、主に指標植物によるウイルス病の診断、同定法を習得した。そして、県内のウイルス様症状ピーマンを検定した結果、TMVであった。その感染源が種子であり、その伝染のメカニズムを明らかにして現地の対策を進めた。それから約3年後ピーマンに今度はCMVが発生し、その対策に現地実証試験を行って解決した。その頃、本邦では初めてとなるピーマンからTSWVを検出した。ウイルス病以外では、露地太陽熱利用土壤消毒試験も行った。1987年から3年間病害虫の専門技術員を務めた。その後、環境部次長（病害虫担当）を拝命、試験研究管理の任に当たった。期間中に産学官（多木化学株式会社、神戸大学、兵庫県）共同研究（トマト青枯病の生物的防除）を加藤 肇先生の御指導により実施した。その他、所属機関在任中の1970年から退職まで、

JICA の集団研修コース（稲病害虫防除，農薬利用，病害虫総合防除）の実験，実習を担当した。因みに，1998年にはフィリピン，タイを訪問し帰国研修員のアフターフォローを行った。翌1999年3月定年退職した。学会活動面では奈良での大会開催時運営委員の一員を受任，関西部会で神戸大学を中心にした開催地運営委員としてその任を果たした程度であり申し訳なく思っている。

一応科学者の端くれとして新しい知見を求め，疑問追及の道を歩んできた。研究成果の評価には，さらにそれらを組み立てた技術を現場における利用者に理解させながらの現地実証が大切であることを噛みしめている。

永年会員 神澤克一

神澤先生におかれましてはお話などのご執筆をご辞退されました。永年会員への推薦おめでとうございます。

## 【今後の学会活動予定】

### 1. 創立100周年記念大会

日時：平成27年3月28日（土）～31日（火）

大会HPサイト：<http://www2.nacos.com/ppsj2015/index.html>

概要：

平成27年3月28日（土）

記念式典・記念講演 9:30～12:00

明治大学 アカデミーコモン・アカデミーホール

記念シンポジウム 13:00～17:00

明治大学 リバティータワー

記念祝賀会 18:30～20:30

東京ドームホテル 天空の間

平成27年3月29日（日）～31日（火）

平成27年度大会 明治大学 リバティータワー

連絡先：平成27年度日本植物病理学会大会事務局

明治大学農学部 植物細胞工学研究室内

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1

E-mail: ppsj2015@meiji.ac.jp

TEL: 044-934-7036 FAX: 044-934-7036

### 2. 談話会・研究会

第15回植物病原菌類談話会

日時：平成27年3月30日（月）18:00～20:00（予定）

場所：明治大学 リバティータワー

## 【学会活動状況】

### 1. 第3回日韓合同シンポジウム開催報告

第1回（平成21年，韓国済州島），第2回（平成24年，

福岡市）に続く第3回日韓合同シンポジウムが平成26年10月23日から24日まで，韓国プサン市において開催された。会場はプサン市にあるキャンパスも広々とした釜慶大学校（Pukyung National University）。2014年韓国植物病理学会秋季大会とも連動したこのシンポジウムに，日本からは76名，韓国からは約250名の参加者があった。

韓国植物病理学会からはWang Hyu Lee会長，日本植物病理学会からは土屋健一会長の挨拶で開会され，プレナリーレクチャーでは，気象変動がアジアの植物病害に与える影響をテーマに，Dae-Jin Yun博士（慶尚大学校）と土屋会長が講演した。さらに招待講演2題のあと，“Global warming and disease management”および“Molecular mechanism of pathogenicity and resistance”の2会場に分かれてプレナリーレクチャーが続けられ，韓国植物病理学会からは4人，日本植物病理学会からも岩波 徹氏，高橋英樹氏，川北一人氏および東條元昭氏の4人が講演を行った。それぞれのテーマについて，各国の第一人者による講演であり，また，日韓には共通の植物病理学的背景があることから，聴衆は熱心に講演に聞き入っていた。ポスター会場では，約270題が発表された。日韓とも若手，学生・院生の姿が目立ち，それぞれに工夫を凝らしたポスターが展示されており，会場が狭く感じられるほどであった。

なお，優秀ポスター賞を受賞した7名の日本人学生あるいは若手研究者の表彰も行われた。受賞者の一人，佐賀県上場営農センターの正司和之氏は「はじめての国際学会での思いがけない受賞で感激しました。研究のスタートからポスターの作成に至るまでたくさんの方に指導していただきました。同じ志を持つ研究者と共に得られた賞なので，本当に嬉しく思っています。これを励みにより一層精進したいと思います。」と，さらに，静岡大学創造科学技術大学院生の達 瑞枝氏は，「日頃なかなか注目されない植物病原細菌の分類に関する研究を評価していただき，本当に嬉しく存じます。また，韓国の諸先生方，学生さんたちとも親しく意見の交換ができ，実り多い経験となりました。」と喜びを語っていた。

翌24日のエクスカージョンでは，バスで博物館，あるいは抗ウイルス剤の開発にも取り組む農薬会社（慶農社）の研究所を懇切な説明とともに見学をしたあと，慶洲の名勝石窟庵や佛国寺などを巡り韓国の文化や味を楽しんだ。

昨今，“おもてなし”がキーワードになっているが，韓国植物病理学会の温かいホスピタリティは素晴らしく，ベテラン会員同士の交流だけでなく，日韓の学生や若手研究者たちもそれぞれに交流を行って楽しんだようである。韓国には日本語の上手な方が多いが，学生たちの中にもテ

レビ番組を見ながら覚えたという日本語の上手な学生もいて、大いに助けられた。一方、日本人学生の多くもまた日頃の研究成果、英語力、そして何より大切なコミュニケーション力を発揮して、活発に交流している点が印象的であった。とくに、懇親会の会場が、ゆるやかにではあるが、年長者と若手に分けられていたことで、学生たちが教員に頼ることなく日韓交流に取り組む機会となったようである。日本植物病理学会の国際化を考えると、留学だけではなく、若手会員に多様な海外体験の機会を与えることがその推進に有効ではないかと感じた今回のシンポジウムであった。(夏秋啓子)



韓国植物病理学会長を囲んで喜びの受賞者たち。  
撮影；Dr. Lim Hyoun-Sub

## 2. 部会開催報告

### (1) 九州部会

平成26年度日本植物病理学会九州部会は11月12日に鹿児島市の「ジェイドガーデンパレス」で一般および特別講演（九州病害虫研究会との共催）、ビデオワークショップが、翌13日には「サンプラザ天文館」でシンポジウムが開催された。参加者は初日の講演会等で約120名、2日目の第38回シンポジウムは約100名であった。一般講演はウイルス病関連6題、菌類病関連6題、細菌病関連3題、防除関連5題、合計20題で、活発な質疑応答が行われた。さらに、元中央農研の鈴木芳人氏による特別講演「迷信に支配されてきた殺虫剤抵抗性対策からの脱却」では、これまでの抵抗性対策への疑問と新たな理論に基づいた対策が提示され、応動昆関係者も多数聴講されていたことから大いに議論が盛り上がった。もう一つの特別講演は丸和バイオケミカルの川島和夫氏による「展着剤をもっと上手に活用するために何が必要か？」で、展着剤の基礎から応用まで幅広く紹介していただいた。また、前年に引き続いてビデオワークショップを開催した。演者は日本農業（株）の

松崎正文氏で、「植物病原菌の単孢子分離法・接種法」について紹介していただき、経験が浅い若い部会員の勉強になるとともに部会員同士の技術の共有・継承という面からも好評であった。講演終了後には同ホテル内会場で地元鹿児島県農業総合センターの富濱毅氏の司会によって「講師を囲む会」（参加者43名）がもたれ、夜が更けるのも忘れるほどに和やかな歓談と情報交換が行われ、参加者の親睦を大いに深めることができた。13日のシンポジウムでは、まず「鹿児島県のジャガイモそうか病の原因菌と防除対策—菌種、定量および動態を中心に—」と題して西八東氏（鹿児島県大隅地域振興局農林水産部）から遺伝子解析技術を駆使した菌種の類別と定量技術を中心に詳細な解説があり、これまで不明な点が多かった同病の動態の解析が可能になったことが示された。次いで、「温暖化に対応するイネ紋枯病研究」について宮坂篤氏（九州沖縄農業研究センター）から九州でのイネの最重要病害である紋枯病についての詳細な解析結果に基づいた新知見が紹介され、高温登熟障害対策も提示された。最後に、「病害診断の現場から 鹿児島県の事例—特にカンキョウグリーン病の診断—」と題して、福元智博氏（鹿児島県農業総合開発センター果樹部）から貴重な事例を報告していただくとともに、同県の島しょ部で発生しているグリーン病の診断と根絶の取り組みが紹介された。幹事会は12日昼の休憩時間に開催され、部会役員の交代・選出、庶務・会計報告、次年度の活動計画等が審議され、13日の総会で承認された。次期部会長は平八重一之氏（九州沖縄農業研究センター）に決まり、27年度からは九州部会独自の事業として、地域貢献賞、地域奨励賞（40歳以下の会員）、学生優秀発表賞を選出することになった。すばらしい部会開催を実現していただいた関係各位に厚くお礼申し上げます。次回は長崎市で開催される予定である。（田代暢哉）

### 3. 第10回植物病害診断教育プログラム報告

平成26年8月25日～29日、第10回植物病害診断教育プログラムを弘前大学農学生命科学部で開催した。受講者は19名、内訳は日本植物病理学会正会員10名、同学生会員1名、非学会員8名であった。土屋健一学会長のご挨拶の後、植物病理学会東北部会会員が講師を勤め、顕微鏡操作・標本作製の基本（田中和明）から開始、前半は水稻の育苗期病害（藤晋一・倉内賢一）と花卉・野菜類の病害（菅原敬・長谷修）をテーマに、罹病イネ標本あるいは栽培圃場から収集した様々な花卉・野菜類の病害標本を材料に、現場で問題となる重要病害の特徴・診断法、類似病害・生理障害との見分け方などを実習した。後半は、担当部会

の地域性を考慮して、果樹病害をテーマに、リンゴの菌類病（赤平知也）・ウイルス性病害（伊藤 伝）・ウイロイド病（佐野輝男）及び小果樹類のウイルス病（磯貝雅道）について、罹病樹の枝葉・根・果実など多様な実物サンプルをもとに、菌類病は外部病徴や顕微鏡観察、ウイルス・ウイロイド病は外部病徴や逆転写 PCR 診断で特徴や類似病害との見分け方を実習した。また、線虫病の診断はニンニクを材料に、罹病組織内の病原線虫の存在形態等を顕微鏡で観察した。全体を通して受講者は今までなかなか目にするのでできなかったいろいろな病原菌類・ウイルス・ウイロイド・線虫病の実物に触れることができたものと思う。

今回、教育プログラムを担当し、会員・非会員を合わせて企業・団体の若手研究員の方々が積極的に参加されている印象を受けた。各人の職場で現場の課題に実務的に対応するための情報、技術、知識を習得するためあるいはそれに触れることができる機会として、教育プログラムが一定の評価を得ていることを感じた。一方、開催地域の普及・研究機関・農協等指導員からの参加者も期待して、一部地域性を考慮したテーマを立てたが、東北地域からの受講者は若干名に留まった。各地域で主催される研究会等で既にある程度の情報・知識は得ており、敢えて受講料を払ってまで参加しなくても、という状況もあったようである。

懇親会の場合あるいはアンケート等を通じて受講者の方々からもいろいろな意見・感想を頂いた。プログラム全体としてはほぼ満足していただけたようであるが、詰め込みすぎでスケジュールがきつかったという感想や、栽培現場を見学する機会があると良かったというご意見もあった。実験室内の実習の合間に、圃場見学に出かける選択肢もあったかなと感じた。最後に、講師の方々には各人の得意分野から実に沢山の病植物サンプルを集めて頂き、積極的に講習にご協力頂いた。この場を借りて深く感謝申し上げます。（佐野輝男）

#### 4. 研究会・談話会等開催報告

##### (1) 第 27 回土壌伝染病談話会

第 27 回土壌伝染病談話会が平成 26 年 9 月 24、25 日の 2 日にわたって岩手県研修センター、アイーナホールで開催されました。同会は昭和 38 年 9 月に北海道大学で第 1 回が開催されて以来ほぼ 2 年ごとに開かれ、今回で 51 年目を迎えたこととなります。参加者は産官学の病害対策関係者を中心に全国から 72 名でした。シンポジウムは第一部と第二部にわかれ、第一部は「農業技術の社会実装における課題」として圃場診断の有用性とその普及・社会実装にまつわる諸問題、第二部は「土壌遺伝子診断の有用性と可

能性」として土壌や作物地下部の診断をテーマとして行われました。

第一部（第 1 日目）では、2006 年にスタートした農林水産省の大型委託プロジェクト（通称「eDNA プロジェクト」）を皮切りに昨年度まで継続して実施された複数のプロジェクト研究の成果が一挙に紹介されました。eDNA プロジェクトは、最近進展が著しいメタ DNA 解析を駆使して土壌微生物に関する基礎的応用的研究を全国的な視野で展開することが意図されていました。作物生産に関する土壌微生物の中で土壌病菌は、当然のことながら重要な位置を占めているので、その一連の研究成果がコンパクトに紹介されることになりました。具体的な成果を一言で表現すると、「（圃場土壌の）健康診断に基づく土壌病害管理（HeSoDiM: Health checkup based Soil-borne Disease Management）」の提唱ということです。これは、現行の防除技術は全体として「最悪を想定した防除」（言い換えると最悪の場合でも効果のある防除）を念頭において開発されているが、これは時に「無駄な防除」にもつながりかねないことから、「健康診断で実践されている予防医学的な考え方」の導入をはかり、とするものです。「いつ発病するか言えないが」「診断項目の基準値に基づいて防除技術の選択や実施の判断をしよう」というものです。

最初に、この一連の研究をリードした農業環境研究所 對馬誠也氏から「健康診断に基づく土壌病害診断・対策支援システム（ヘソディム）の実用化を例として」のテーマで口火を切っていただき、ついで兵庫県 相野公孝氏が「産官学共同研究から実用化まで 一長い道のり」、さらに守川俊幸氏・桃井千巳氏・三室元氣氏が「技術開発と普及の困難さに由来している『難防除』を克服するには」、池田健太郎氏「キャベツバーティシリウム萎凋病の診断・対策支援技術の普及に向けた取り組み」、鈴木啓史氏「畑の健康診断（ヘソディム）によるキャベツ根こぶ病対策の普及に向けた取り組み」、美野光哉氏「土壌分析事業の取り組みについて」と題して講演が進められました。途中の進行を含めて小板橋基夫氏と吉田重信氏の座長で進行し、最後の総合討論でも活発な意見交換が行われました。第一部のテーマは、新しく開発された技術の紹介だけではありませんでした。その技術をいかにして社会実装するか、についても議論が交わされました。新しい農業技術の開発は日々なされていますが、それは社会で使われて始めて意味のあるものになります。研究者は時としてこの「社会実装」を簡単に考えがちですが、これにもっと注意を払うべきではないか、という指摘が印象的でした。圃場診断や生物防除技術の社会実装に何が必要か、について熱心な討論がなさ

れました。

2日目の第二部では、東北北海道の最近の知見がとりあげられました。最初に秋田県立大学 古屋廣光から第二部の企画の意図が説明された後、次のテーマで順次、講演が行われました。永坂 厚氏「ホモプシス根腐病の予防的な総合防除体系の開発」、戸田 武氏「RISA法を使用した根の菌相解析による *Pythium* 属菌の効果的な検出」、西脇由恵氏「北海道におけるトマト褐色根腐病の発生実態と総合防除対策」、串田篤彦氏「植物寄生性線虫診断への新アプローチ—グループ特異的プライマーの可能性—」、古屋廣光「土壌・根の病原菌遺伝子検査の有用性」。いずれの講演でも発表者の方々の最近の成果がわかりやすく紹介され、個性的なアイデアをもとに新しい技術の開発に向けた独創的な取り組みがなされているようすがよくわかりました。これらのご講演では、対象とする病気や病原体はすべて違いますが、それぞれ圃場診断が役に立った、圃場診断ができればさらに合理的な土壌病防除ができる、との認識が繰返し述べられたほか、遺伝子診断技術が圃場診断に役に立つ、あるいは役に立てるための技術ができつつある、との報告が相次ぎました。現在、農家は自身が耕す圃場の土壌微生物についてほとんど何も知らないままで栽培に取り組んでいます。土壌微生物の中で土壌伝染性病原菌は作物生育に極めて大きな影響を与えています。土壌微生物全体とまではいなくても、自分の畑の土壌病菌のことをよく知ったうえで、作物生産に取り組むことができるような技術開発が強く望まれます。

次回、第28回土壌伝染病談話会は佐賀県の田代暢哉氏を開催地幹事として平成28年度に行われることになります。

(古屋廣光)

## (2) 第26回植物細菌病談話会

第26回植物細菌病談話会は、平成26年10月9日および10日に、岡山市の岡山空港温泉「レスパール藤ヶ鳴」において開催された。参加者は北は北海道から南は九州まで各都道府県の公設試験場、農水省系独立行政法人、企業、大学教員や学生など総勢57名であった。今回の談話会では全体を3部構成としてご発表を頂いた。

初日の第1部「青枯病研究の新展開」では、計8名の講演者に発表をして頂いた。最初のセッション「発生生態・感染行動」の座長を現学会長の土屋健一氏にお願いし、長崎県の菅康弘氏による「日本産ジャガイモ青枯病細菌の系統と病原性」と、広島大学の加藤純一氏による「青枯病菌の走化性研究：感染最初期過程におけるその役割」という演題で発表を頂いた。2つ目のセッション「エフェクター

と抵抗性」では、高知大学の曳地康史氏に座長をお願いし、岡山県の向原隆文氏による「青枯病菌における宿主域拡大の分子機構」と香川大学の市村和也氏による「植物免疫応答の分子機構解明に向けた青枯病菌 effectomics アプローチ」という演題で発表を頂いた。3つ目のセッション「防除」の前半では、中央農研の畔上耕児氏に座長をお願いし、中央農研の中保一浩氏による「高接ぎ木法によるトマト青枯病総合防除技術の開発」と広島大学の山田隆氏による「青枯病菌の繊維状ファージ：病原性の諸刃の剣」という演題で発表を頂き、後半では、生物研の瀬尾茂美氏に座長をお願いし、東北大学の高橋英樹氏に「微生物防除資材を用いたトマト青枯病抑制の分子基盤」を、兵庫県の相野公孝氏に「ナス科青枯病防除の現状と今後の展開」をご発表頂いた。引き続き第2部では、座長を岡山県の向原隆文氏にお願いし、特別講演として奈良女子大学の佐伯和彦氏に「根粒菌菌体外分泌系による窒素固定共生の制御」をご講演頂いた。

翌2日目には第3部として「最近話題の細菌病研究」として7名のご講演を頂いた。1つ目の講演として、座長を静岡大学の瀧川雄一氏にお願いし、愛媛県の清水伸一氏に「愛媛県におけるキウイフルーツかいよう病新系統の発生とその拡散防止対策」を発表頂いた。昨年3月に、学会ホームページで本談話会の案内開始時には、この講演は予定されていなかったが、昨年4月以降、愛媛県他でキウイかいよう病 Psa3 系統の新発生が確認され、大きな問題となっていることより、急遽ご講演をお願いさせて頂いたものである。2つ目と3つ目の講演は、京都府立大学の津下誠治氏に座長をお願いし、中央農研の井上康宏氏に「非病原性 *Xanthomonas* 属細菌を用いた、適応病害の多い微生物農業開発の試み」を、次に近畿大学の川崎 努氏に「*Xanthomonas* エフェクターによる宿主のユビキチン修飾系の制御」を発表頂いた。引き続き、茨城大学の古谷綾子氏に座長をお願いし、岡山県の川口 章氏による「モモせん孔細菌病のコホート内症例対照研究とロジスティック回帰による疫学研究」と、果樹研の藤川貴史氏による「カンキョウグリーンング病の脅威とその対策—研究開発でできること—」を発表頂いた。さらに、高知大学の西浩平氏に座長をお願いし、生物研の竹内香純氏により「細菌が「のほほんモード」に戻る時—拮抗細菌のシグナル伝達系のオンとオフ—」を、宇都宮大の諸星知広氏に「ジャガイモ共生細菌間コミュニケーションを利用した植物病防除技術の開発」と題した講演を頂いた。最後に、静岡大学の瀧川雄一氏の司会による総合討論を行い、談話会は成功裏に終えることができた。

植物細菌病談話会は、第25回を開催後、第2回の日韓シンポジウムを挟んだため、実に5年ぶりの開催となった。

その間の発見、発展には目覚ましいものがあり、どの講演も盛んな質疑応答が行われた。紙面の都合上、個々の講演内容の説明はしないが、活発な討論が行われたことを記しておきたい。また、今回の談話会は、保養施設である温泉での泊まり込み合宿形式で開催した。限られた時間で16題の講演をして頂いたため、発表者の中には語り尽くせなかったところもあるかも知れないが、初日の懇親会とそれに引き続く二次会では多めに盛り上がり、質疑応答の続きや、新しい共同研究の打合せが行われた。何より日本の植物細菌病関係者が親睦を図り、交流が促進されたことに大きな意義があると感じている。2日目の朝食時を兼ねて、幹事会を開催し、次回開催地幹事に津下誠治氏を選出した。平成28年の開催予定となる。また、本談話会における講演の中から日本植物病理学会報において総説を執筆して頂く方の選出方法を協議し、談話会終了後に清水伸一氏ならびに竹内香純氏を幹事会推薦として選出した。両氏には総説の執筆を快諾頂くことができたので、本談話会に参加頂けなかった方々にもご一読をお勧めしたい。

なお、今回の談話会では開催地幹事として岡山県の向原隆文氏、川口章氏に周到な準備をして頂いた。また、当日は岡山大学の能年義輝氏ならびに学生諸氏の協力を頂いた。ここに記して感謝したい。(一瀬勇規)

#### 【学会ニュース編集委員コーナー】

学会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたく願います。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内  
学会ニュース編集委員会  
FAX: 03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、宇垣正志、有江 力、宇賀博之、奥田 充

---

#### 編集後記

新年おめでとうございます。学会にとって大きな節目となる百周年の年を迎えました。会員の皆様方のご健勝と、学会のさらなる発展をお祈りします。

学会ニュース第69号をお届けします。本号は、今年度に推薦された名誉会員・永年会員のご紹介、本年度に開催された部会や談話会などの学会活動状況を中心に掲載しました。

新名誉会員、新永年会員の皆様の長年にわたる学会へのご貢献に深く感謝申し上げますとともに、植物病理学、農業振興などにおける国内外での精力的なご活躍に対して敬意を表します。示唆に富むお話とともに本会や会員への励ましのお言葉をいただきました。心に刻みたいと思います。

部会は順調に開催されました。前号に続いて本号では九州部会の開催状況の報告がありました。一般講演に加えて特別講演、ビデオワークショップ、シンポジウムが行われ、興味深い講演と活発な質疑応答が交わされています。開催にご尽力いただきました関係の皆様にも厚くお礼申し上げます。

昨夏から秋にかけてシンポジウムや研究会・談話会が開催されました。日韓合同シンポジウムには日本から76名が参加し、学生や若手研究者たちも交流を深めたようで喜ばしいことです。植物病害診断教育プログラムでは、若手研究者の方々に病害防除の実務的な知識や技術を習得する貴重な機会が提供されました。準備、運営にご尽力いただきました佐野先生をはじめ関係の皆さまに深くお礼申し上げます。土壌伝染病談話会、植物細菌病談話会とも盛会で、多岐にわたる幅広い話題の提供とそれをめぐって熱心な論議が行われたことが報告からうかがえます。様々な場で活発に学会活動が継続されています。ご参加の皆様、お疲れさまでした。

直前に迫った創立100周年記念大会の案内を掲載しました。奮ってご参加いただきますよう改めてお願い申し上げます。(高橋賢司)

---